二次元ぷち文庫

ボクのメイドは同級生

真夏の海と内緒の夜

神楽陽子
表紙イラスト／犬洞あん

試し読み版

当ファイルは、モバイル二次元ドリームにて配信された
『ボクのメイドは同級生　真夏の海と内緒の夜』
に基づいて作成しております。

※本作は二次元ドリーム文庫『ボクのメイドは同級生』（キルタイムコミュニケーション刊）とともにお読みいただきますと、よりお楽しみいただけます。

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

ボクのメイドは同級生
真夏の海と内緒の夜
神楽陽子
表紙／犬洞あん
二次元ぷち文庫

登場人物紹介

Characters

遠藤 萌葱（えんどう もえぎ）

私立Ｋ央学院一年三組のクラス委員長。皆に頼られるまとめ上手な少女。しかし、実は同級生の少年、七一誠と同居しており、屋敷では彼に誠心誠意奉仕する、メイドの顔を持つ。

七 一誠（ななかず いっせい）

一年三組の男子生徒。美術部に所属。一見冴えない少年だが、実は、資産家のひとり息子である。自宅の屋敷に萌葱をメイドとして同居していることは、周囲には秘密にしている。

学院も夏休みに入り、カレンダーの七月を八月に変えた頃のこと。七一誠と遠藤萌葱の所属する一年三組は、課外授業の一環として、海水浴を楽しんでいた。

課外授業などとは名ばかりで、ありていにいえば「遠足」だ。ただし現地集合かつ現地解散であって、集団行動の自立性がいかにもハイティーンらしい。

今日は文句なしの快晴であり、空は遠くまで青く澄んでいる。太陽の光を溶け込ませたコバルトブルーの海が揺らめいて、砂浜に小波を運ぶ。

親子連れ、友達同士、カップルとさまざまな男女が、ここでは開放的な水着姿で、好き放題にはしゃいでいた。

せっかくの水着姿をTシャツで隠してしまっているのは、クラス委員長の萌葱だけ。

クラスの女子はにやりと歯を光らせ、無言で頷きあった。

「遠藤さん、水着買ったんでしょ？　みーせーてー」

「えっ？　で、でも、いざ着たら急に恥ずかしくなっちゃって……」

咄嗟に萌葱は我が身をかき抱くものの、すでに後ろまでまわり込まれていて、女子の手が一斉にTシャツに襲いかかる。

「海なんだから、ちゃんと水着でいなくっちゃ！　お～、ナイスプロポーション！」

「キャー！　あはは、やめ、やめて、くすぐったいから、触らないで～！」

その様子を、一誠は遠くから眺めるしかなかった。女子のじゃれあいに割り込むほど野

暮なつもりはないし、皆の前で「彼女」に声を掛ける度胸もない。
出発前に日焼け止めクリームを塗ってくれた「メイド」の、水着姿が気になるのに。
（どんな水着を買ったかはお楽しみ、とか言って、見せてくれなかったもんなあ）
容姿端麗で大人びた雰囲気の彼女なら、何でも上手に着こなせそうだ。逆に顔つきも身体つきも幼い作りの少年は、ぶかぶかのショートパンツを無理やり紐で括っていた。
「はあ……」
眩しい浜にひとり蹲って、砂を弄りながら小さな溜め息。
見渡す限りの海水浴場にいる、同世代の男子は誰もが男らしい体格だ。筋骨隆々とまではいかなくとも、腕や胴の発達に力強さが見て取れる。
「何しょぼくれてんだよ、一誠」
クラスの男子にとんっと背中をノックされた。七一誠の苗字は「ななかず」と変わった読み方をするため、クラスメートは皆、一誠のことを名前で呼ぶ。
声を掛けてきたのは男女混合のメンバーだった。
「どうせ遠藤さんに声掛ける勇気はないんだろ？　だったらお前も入れって」
最初の一言で図星を突かれた少年は、ぼっと赤面する。
「ぼぼっボクは別に、そんなつもりじゃ」
「照れるな、照れるな。そんなことより、お前もこっちこいよ。一緒にしようぜ」

遠藤萌葱のことばかり考えていたせいもあって、誘いの意味がわからない。
「一緒に……何するの？」
首傾げる一誠を見下ろし、クラスの男子はやれやれと肩を竦めた。
「ナ・ン・パ。海に来たんだぜ、どんどん誘ってみなきゃだろ」
同メンバーの女子からも誘われる。
「もうちょっと人数が欲しいの。一誠くん、暇なんでしょ？」
ナンパなど一誠には経験がない。考えたこともない。そもそも一誠にとっての「海」といえば、「別荘の窓から眺める」外の世界だ。浜で大勢と遊ぶこと自体が、初体験で、遊ぶといっても、何をどう始めればよいのかさっぱり。
実は七一誠、大資産家のひとり息子である。
「なんぱって、ええと……付きあったりするの？　そ、そういうの、ボクは……」
できることなら「ナンパ」という難しそうな遊びには、参加したくない。
しかし、いつまでも座り込んでいると腕を引かれた。
「お前、飛躍しすぎ。『一緒に遊ばないか？』って誘うだけだって。こういうの、ひとりでやるより、二、三人でやったほうが成功率高いんだ」
「私たちも男の子に声掛けたいんだけど、女だけだとちょっと怖いし。一誠くんも一緒にまわろ、ね？　決まり！」

いつだって少年の自己主張が弱いことを、おそらく知ったうえで参加を促してくる。
「で、でもボク……」
彼女がいるのに、とは口に出せない。萌葱との関係は絶対に秘密だ。
（いいのかな？　友達に誘われたからって、こんなこと）
ちらりと背中越しに窺うと、本命彼女の視線に射抜かれた。どうやら話が聞こえていたらしく、後で一言も二言もありそうな表情だ。とても目を合わせていられなくて、水着姿を眺めるどころではない。
「ち、違うんだよ？　も……えっ、遠藤さん！　ボクは別に」
「早く行こうぜ。なあ、どっからまわってみる？」
強制される形とはいえ、恋人が見ているにもかかわらず、ナンパをするはめに。

メンバーの男子はターゲットの団体を探している。こちらと同じく、男女混合で適度な人数が望ましいらしい。
その間は軽く水遊びがてら、興味津々にクラスの女子が話しかけてきた。
「一誠くんは遠藤さんに告白しないの？」
「え？　こ……こっ、コクハクって⁉」
いきなり話を振られて、焦る。

七一誠と遠藤萌葱の関係を、クラスメートは幼馴染みくらいにしか知らない。本当は萌葱がひとつ年上であることにも気付いていないようだ。ふたりはれっきとした恋人同士で、何より――ご主人様と、たったひとりの愛しのメイド。

そうとは知らない女子の面々が、内緒話にしては声を大きく弾ませる。

「みんな気付いてるわよ。一誠くん、よく遠藤さんのことポ～ッて見てるし。好きなんでしょー？　大丈夫、言わなくてもわかってるから」

「一誠くんも今日は泊まり、よね？　今夜は遠藤さんに想いのたけを打ち明けて……」

その「今夜」を生々しく想像してしまった男の子は、俯く顔を赤らめた。

（泊まり、かあ）

課外授業は今日一日だけだが、せっかく海まで来て、日帰りではもったいない。そこで希望者は一晩宿泊することになっていた。

人数の確認から民宿の手配まで、手際よくこなしてくれたのが、クラス委員長の萌葱である。担任の許可も得たらしい。

団体責任者となる萌葱が泊まるので、一誠もそうすることにした。広い屋敷にひとりで帰っても寂しいし、肝心のメイドが不在では、食事も風呂も着替えも困る。

得意そうに女子が人差し指を立てた。

「そ・こ・で！　一誠くんのため、い～アイデアがあるワケ」

「……はい、かしこまりました……」

さっき腰を抜かした際には、足が動かないと言っていたが、いもしない幽霊に対する恐怖心は完全に忘れているのだろう。股座の有様を大胆華麗に見せびらかす。

太腿の肉付きがよく、見ているだけでむしゃぶりつきたくなる。その付け根はローレグのビキニで心許なく括られていた。

三角形の薄布に隠れた部分は、汗では考えられない液でぐしょぐしょだ。水というよりも汁であって、指にやたらと絡みつく。

「ねえ、萌葱？　外だからエッチすぎるのダメって、さっきは言ってたけど……こんなに濡れてるよ。これはエッチすぎるんじゃないかなあ？」

「それは、ご主人様が……い、いえ、はしたない私のカラダが、感じてしまって」

決して一誠のせいにすることなく、メイドは上擦った声で発情を認めた。懐中電灯も注目する美女の股間からは、透明の蜜が零れ続ける。

清楚かつ上品なメイドの、はしたなくていやらしい穴の場所。少年は裸乳越しにそこを見下ろして、温もった股肌に中指を潜り込ませ、萌葱の秘密を探し当てた。

縦筋をこじ開けて侵入すると、萌葱の小顔に愛らしい羞恥が浮かぶ。

「あ？　あっまだ、私、心の……くふぅう！」

心の準備、と言いたかったのだろうか。しかし清純派のオマ○コは、準備万端といって

気になるシーンを試し読み
ここからスタート！

も差し支えないくらいに濡れそぼっていた。感触だけを頼りに、肉唇を押し分け、入り口を浅く穿り返す。

「いつも不思議に思うんだ。オマ○コって、どうしてこんなに濡れるのかなって」

男性には発情しても「濡れる」という生理がないため、何度触れても新鮮だ。潤った高温の粘膜が指にもつれ、ひくひくと刺激を催促する。

メイドは開脚姿勢を引き攣らせ、片方の爪先から草鞋を落とした。

「んはあぁ！　はあっ、ン、濡れてしまうんです……ご主人様に、あ、愛していただくと、こんなふうに……外なのに、私……！」

彼女に屋外であることを強調されるたび、忘れかけていた背徳感が風を吹かせる。衣服を着ている少年はともかく、その空気に全裸を晒しているのと変わらない萌葱は、美貌を真っ赤に染めていた。

肉感的な太腿を自ら両手で抱え、指を立てる。裸の巨乳を呼吸で弾ませ、ご主人様直々の「指マ○コ」に悶絶する。

「あふぅんッ！　ご主人様、んく、お、お戯れはもう、これくらいに、ぃひあ！」

これくらいで終わりにして欲しい、と言葉では訴えながらも、素直に脚を開いているのがいじらしい。壺口の締めつけだけでも、中指が外れにくくなるほどで、挿入の意欲は衝動的に高まった。

「萌葱がエッチすぎるから、ボク、ガマンなんてできそうにないよ。……萌葱は？　萌葱はこんなぐちょぐちょにして、今夜はガマンしてられるの？」

男根の形を真似るように中指を反らせ、侵入を深くする。指の細さでも感じられる膣圧のうねりが、またも蜜を滲ませる。

「萌葱に決めさせてあげるよ。今夜はひとりでオナニーするか、今ここで、ボクとエッチしちゃうか」

「そ、そんなこと……」

萌葱は決断に迷っていたが、濡れ穴は、ご主人様の中指に吸いついて一向に離れようとしなかった。ゆっくりと引き抜けば、後を追って大量の蜜が溢れてくる。純白のビキニはいやらしい液体でぐしょぐしょ。

少年は指で蜜糸を伸ばし、左の乳角に括りつけた。言葉に期待も含めて、囁く。

「正直に答えてね。ここで……エッチ、する？」

ところが、メイドは俯いて、かぶりを振ってしまう。

「……いけません。ご主人様のご意向を無視して、私が差し出がましく決められることではないのです。……ですから、んはあ、やはりご主人様が……」

遠まわしの「ＹＥＳ」だった。模範的なメイドとしての立ち居振る舞いを忘れず、彼女は必ず、子どもっぽいご主人様を立たせてくれる。

「お命じになってください、どうぞ……私のオマ○コに」

ご主人様のオチンチンを「勃たせる」のも上手だ。草むらに両手を下ろして、一誠を真後ろに四つん這いになり、丸く張ったお尻を差し出しながら震わせる。

たったひとつの懐中電灯でライトアップされた、一片の草むらが今夜のベッド。ふたりきりの光の中で、一誠も服を脱ぎ捨てる。

「じゃあ……命令、しちゃおうかな」

脱ぐことで、夜風の意外な肌寒さを実感した。このような場所に女子を連れ込んで、裸になり、セックスをする。そう考えるだけで、ぞっと寒気に襲われる。

にもかかわらず、肉棒は雄々しくいきり勃ち、すでに傘を張っていた。どうやら自分の逸物は、男性の平均を上まわるサイズらしい。

ペニスで感じる外気にぞくぞくする。

「こっち向いて？　萌葱。ほら……ボクのオチンチン」

ビキニ姿のメイドは肩越しに振り向き、惚れ惚れとしたまなざしで、男の子の卑猥な形を見詰めた。

「ご主人様の……とても元気でいらっしゃいます」

褒められた肉棒がひくひくと疼く。萌葱に勃起させられるといつも、鉛みたいに重たくて、触らずとも脈拍を数えることができる。腫れあがった亀頭は鈴口から蜜を先走らせ、

「んはぁあああッ！　おっおしり、んあっ、めくれひゃいます、ごひゅじんさまぁ！」

途端に萌葱の呂律がまわらなくなった。みっともなく舌を垂らし、瞳は瞼寄りに夜空を見上げる。まるで、我慢に我慢を重ねた末にモノをひり出すみたいな、心地よさそうな顔で。唇の端は、はにかんでいるようにも思えた。

「さては萌葱、っくはぁ、トイレの時もそんなカオ、しちゃってる？」

辱めの言葉を投げつけると、純真無垢なメイドがぼっと赤面する。それでもご主人様の質問には、いつだって正直だ。

「そんな、こと……ご主人様の、ひぁ、お、オチンチンだからです……んふう！」

無理に一誠が腰を引かずとも、肛門が幹太をひり出してくれる。硬い縄で括ったみたいに狭苦しい窄まりは、サオを丹念に扱きあげ、雁首を牽引した。

「くはっぁぁ、萌葱！」

次は吸い込みが始まり、アナルの液体感に亀頭が溺れてしまう。肌の内側であることが信じられないくらいに熱くて、そこだけ「お風呂」が沸いてくる。

責める側のご主人様も快絶に屈服し、メイドと繋いだ手を固くした。剥き出しの雁太は柔らかな粘膜で優しくしゃぶられる、一方で、支柱は容赦なく苛烈に扱き抜かれる。穴はひとつなのに、刺激は二種類あって、肉棒が前後するごとに大きく変動する。

「おっおしりが、また、勝手に……おふっ、オチンチンを、んはぁ！　ご主人様の大切な

女キャラクター
えっ試し読み

オチンチンを、たっ、食べてしまって！」

萌葱は指をきつく曲げつつ、それ以上にきつく一誠の勃起を食い締めた。外に捲れた粘膜もろとも、硬いペニスを吸引し、自ら栓をする。

ぐちゅぐちゅ、ずぶっ！　ずちゅぐちゅっ、ぐちゃっ！

猥音を立てまくり、ご主人様のオチンチンを熱烈にマッサージ。だんだんとふたりの腰の動きはシンクロし、稚拙だったピストンもリズムに乗ってきた。

「もっと食べさせてあげるよ、はあっ！　んくはあ！」

「は、激しすぎます！　ご主人様、あぁん、お手柔らかに！」

高温多湿の境界線はみるみる溶けて、淫猥な一体感にご主人様も、そしてメイドも酔いしれる。エラ張りの怒張の形は、擦ってみなければ一誠にも感覚できず、擦った分だけ、強い痺れに食らいつかれた。

「んあっ！　らめです、あふ、おしりのあなが……ひはぁん！　び、びりびりって、変なのきちゃうんれす！」

萌葱も同じ痺れにお尻の中を襲われているらしい。敏感そうに肩をわななかせ、弾む巨乳の重量で、返す腰に反動を持たせる。

汗みずくのお尻は、全体がほの赤く染まり、独特の曲線を少年の股間に何度もぶつけてきた。アナルのぬかるみは意外に、極太の抜き挿しに適しており、意図になくともペース

が上がってしまう。

「気持ちいいよ、はあ！　萌葱の！　萌葱のあなる！」

性的興奮も衝動じみたものになり、口が勝手に、彼女をより辱める言葉を選ぶ。内気な少年にもそうさせるほど、今夜のメイドはマゾの色気をかもし出していた。

「私もです！　んふあっ、あく、あなる！　あなるがいいんれすぅ！」

肛門快美にうっとりとして、快楽の出所をアピールする。肉棒が深く嵌まると、とても満足そうに瞳を笑ませる。

普段はおしとやかなメイドの、乱れる姿がたまらなく愛しい。夢中になって一誠は、彼女の喘ぎを押し出すように、尻穴の奥を突きまくった。

「ほんと萌葱は、はあっ、あなるが弱いよね！　ほら、ふう、もっと感じて！」

悦痺が亀頭の表面を焦がす。押すにしろ引くにしろ、液の中を泳ぐような刺激が無数に絡まり、快楽神経に溶け込んでくる。

メイドは一生懸命に肛門を締めて、サオを強めに扱いてくれた。

「感じれ、ひはあっ感じてます！　ご主人様のオチンチンが、あひぁ、わたくしのオシリの中をかきまわひて！　あっやぁ！　またおっきぃのきちゃうぅ！」

懐中電灯のライトに晒された巨乳を反らし、太腿の筋を伸びきらせる。少年よりも多くの涎を垂らして、アナルの快楽によがる。汗だくの素肌は、お湯から引き上げたばかりの

茹で卵のように火照っていた。

（き……気持ち、よすぎる……！）

萌葱の体温や吐息を近くに感じられるほど、頭がくらっとする。年上の幼馴染みと不謹慎な遊びに没頭できる関係になった、少しの罪悪感と大きな幸福感は、アナルの中のようにぐちゃぐちゃだ。それを、オチンチンで無節操にかきまわす。

回数をこなすうちにストロークの軌道も出来上がり、スムーズになった。

ずぼおっ！　ずぼっ、ずぼ！　ずぼ！　ずぼ！

萌葱が穴を狭めるものだから、抜く方向で粘音は一気に弾ける。

「ズボズボいってるよ、はあ！　萌葱の！　萌葱のあなるだよ、聞こえてる？」

「聞こえて、おります……ンひぃい！　あいっもお、もぉわたくし！」

ここまで乱れても乙女の羞恥を振り払えない、多感なメイドが、少年の手をリズムよく引いた。それに合わせて、お互いが腰を駆使し、淫猥な摩擦を共有する。

手つきだけは社交界のダンスのように、穴と勃起は我も忘れて、貪欲に。

「くうっ、も……萌葱、ボク！　ボクもイク、出ちゃいそう！」

ペニスの根源に、俄に高熱が集まってくる。膀胱が瞬時に膨らんだかのような焦燥感に駆られると同時に、亀頭が病的にむず痒くなり、濡れそぼった摩擦を急ぐ。

「ご主人様ぁ！　んあっ、わ、わたくしもご一緒させてください！　あぁあっ、あなるで

失礼いたします、ど、どうか！」

白ビキニのメイドも首を振りまわすくらいに悩乱して、連鎖的に喘ぎを吐き出し、自らの言葉を妨げた。あれだけ後ろの穴では嫌がっていたはずなのに、アナルがいい、とお尻を精一杯に震わせる。

ずぼずぼずぼ！　ずぼずぼずぼずぼ！

「イクよ、萌葱っ！　はぁ、も……もうボク！」

繋いだ手を引き戻しながら、少年は夢中で腰を前後に打った。肛門の強い吸いつきを雁首までスライドさせては、灼熱のアナルに全長を飛び込ませる。痺れと痺れの間隔は少しもなく、お尻の中は刺激の荒波だ。

まだ尿の出口を使えない高熱が、圧迫感となり、男の子をひたすら急かす。

「やっぁぁ！　イっちゃう、はひっわたくし、先に……まっ、まだらめ、ご一緒したひんれす、ご主人様ぁあ！」

「一緒だよ！　萌葱もイクんだ、はあっ！　はぁはあ！」

敬愛するご主人様と一緒に果てたいらしい、健気なメイドが、女体曲線をぐいっとのけぞらせた。裸の巨乳をたわわに揺らし、乳角で宙に円を描く。悩ましい腰つきを上手に波打たせ、興奮状態のオチンチンを、プライバシーの穴でしゃぶり尽くす。

煮えた粘膜が熱烈に少年を根元まで包み込んだ。

「はいっ、い、イきます！　ご主人様っ、今夜はあなるで！　んはっ、あなるれ、お慕い申し上げます！　あっぁぁ！　んあ！　んふぁああ！」

もっとも深く嵌まった瞬間、アナルがこれまでになく収縮した。結腸のうねりがダイレクトに肉棒を締め上げる。

両手を一誠と引っ張りあいっこしながら、萌葱は夜空に向かっていなないた。

「あああっああ、あなるぅうううぅうううううう――――！」

ご主人様を見詰めていたがる、背中越しの表情が蕩けていく。気品に満ちた唇を、涎で台なしにしようとも、涙ぐんだ瞳に恍惚を浮かべる。

ビキニのショーツに愛蜜が氾濫するのを、股肌で熱く感じながら、一誠も喘いだ。

「はあっぁぁ！　漏れちゃう！　あっ！　あぁああっ、あああっ！」

敏感な尿道を甘い快感が駆け始め、もう「ア」としか発音できない。萌葱の深いところに引きずり込まれた亀頭が、瞬く間に蕩かされてしまう。

どびゅ！　どびゅっ、どびゅ！　びゅくっ！　びくびく！　びくびくびく！

頭の中もとろとろだ。無意識に萌葱の背中にくっついて、肉悦の一体感に陶酔する。密封されていては液が飛ばず、拍動と高熱ばかり鮮明だった。

彼女の粘膜に自分の液が溶け込むのを、勃起そのもので熱く感じられる。

「はぁぁ……萌葱、出てるよ……ボクの、んはあ、あぁまだ出てる！」

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/